

古文書倶楽部

【発行】
秋田県公文書館
2019.7
第90号

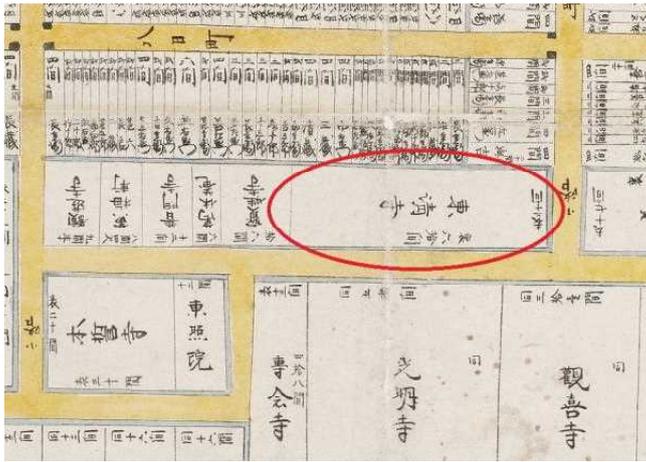
古文書解読講座(七月毎週金曜日開催)への参加申込は締め切りさせていただきました。多数の受講申込をいただき、ありがとうございます。

神社の由来を辿ってみれば

〜国替え直後の佐竹氏と在地勢力〜

金砂神社といえは秋田市保戸野金砂町の地名の由来となった神社ですが、「岡本元朝日記」には「金砂権現」にお参りした記事が散見されます。ただし最初から現地に鎮座していたわけではないようです。「岡本元朝日記」元禄十六年二月二十一日条には

「今日吉日故金砂権現并二内福院八町屋敷へ移シ候祝いたし候」



「外町屋敷間数絵図」(部分: 県 C-164)

とあり、金砂権現とその住持と思われる円福院の屋敷が保戸野八町(秋田市保戸野八丁)に移された事が記されています。

では、どこから現在地に移ったのでしようか。寛文三年(一六六三)の久保田の町人町の様子を描いた「外町屋敷間数絵図」(県C-164)で金砂権現とその別当寺であった東清寺を探してみると、寺町付近に見つけることができます。

さらに時代を遡ると、金砂権現は常陸国金砂(茨城県常陸太田市)に役小角えんのおの(おん)が創建し、慈覚大師(円仁)が中興した神仏習合の寺院であったとされています(「金砂両山大権現大縁起」A H一七五―〇五)。同地は佐竹氏が源頼朝に攻められた時に金砂山城に籠城するなど、数度に渡って佐竹氏の危機を救った地でもありました。

佐竹氏が秋田に国替えとなった時の住持(住職)は宥玄阿闍梨といい、武士として数度の戦功を挙げた後、常陸国にあった金砂山東清寺の住職となつたとされ、「東清寺之内金砂大権現御霊之宮之いわれ」(県B-四三三)には「大力の勇僧」と記されています。以下は「金砂両山大権現大縁起」に見える記事です。

慶長七年五月義宣公改△国政当国御拜任シ之時、宥玄阿闍梨毎年湯殿山参詣之故、依為羽州之案内者御兵具五十駄来於運送之奉行、又重而命テ義宣公御幼妹後高倉前大納言藤原永慶卿之室勤△御供出羽国仙北下着、御姫公ヲ八奉置金沢之城、御兵具ヲ収納ス本堂古城二、一揆蜂

起而為奪於御兵具困本堂之古城、宥玄弟子同宿在寺之人数催集、矢石放鉄砲依防戦一揆不得入、東将監從増田後詰、梶原美濃守政景從大曲後詰未到半途一揆悉退散

宥玄は毎年、湯殿山(山形県)に参詣していたことから、慶長七年(一六〇二)五月、佐竹氏が秋田に国替えとなった際に道案内の役目を命じられ、佐竹義宣の幼い妹のお供として、また馬五十頭分の兵具を運送する奉行として秋田に赴き、妹君は金沢城(横手市)に入り、兵具は本堂城(美郷町)に収納しました。ところがその兵具を奪おうと一揆勢が蜂起してきたのです。

宥玄は弟子などを集めて矢や石を放ち、鉄砲で応戦するなどして、一揆勢が城に侵入するのを防いでいたところ、増田(横手市)にいた佐竹将監義賢(佐竹東家)と、大曲(大仙市)にいた梶原美濃守政景が駆けつけ、一揆勢は退散していききました。

後に秋田に入った佐竹義重は、宥玄の働きに対し金砂山東清寺に寺領として百石を与え、これが秋田における同寺の始まりとなりました。

佐竹氏が秋田に入ったばかりの時期には、大館城の受取りに際して浅利氏旧臣が引き渡しを拒否したり、刈和野では戸沢氏の旧臣が勢力を振るうなど、各地で旧来の勢力が佐竹氏に対して抵抗する動きがあり、すんなりと支配体制を確立できなかったのではなかったようです。

ちなみに宥玄と一緒に秋田に入った姫君は、後に京都の公家である高倉氏に嫁ぎ、その息子が佐竹北家を相続して佐竹義隣となりました。義隣は明暦二年(一六五六)に所預として角館(仙北市)に入り、京都の文化をもたらしました。宥玄の働きが無ければ、金沢城にいた姫君も危ういところでしたので、角館が「みちのくの小京都」と言われることもなかったかもしれませんね。【煙山英俊】

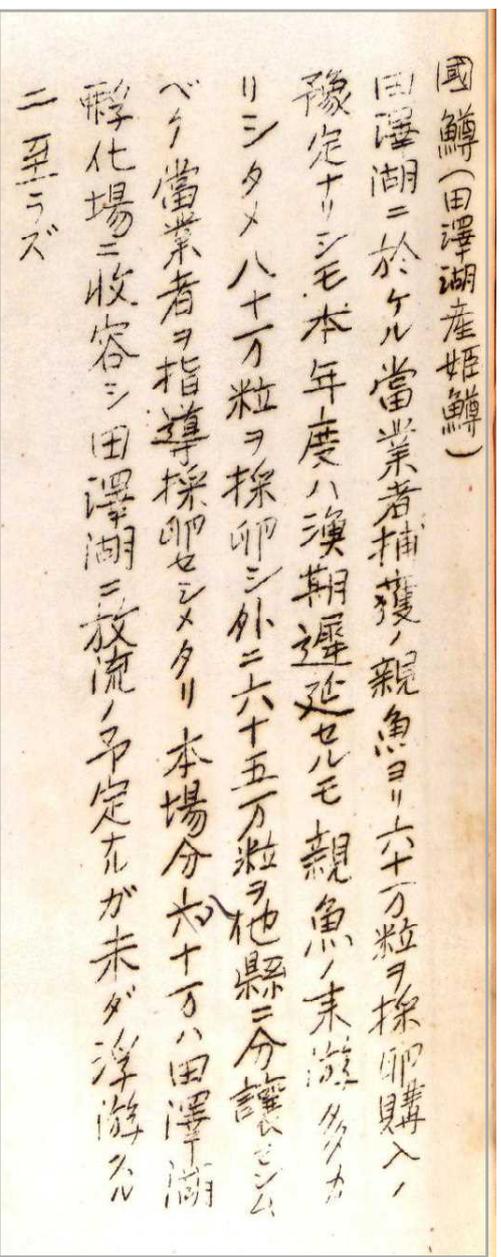
「国鱒（田沢湖産姫鱒）」！ クニマスが生き延びた経緯

平成二十二年（二〇一〇）十二月、田沢湖で絶滅したクニマスについて、遠く離れた山梨県の西湖で棲息を発見したニュースは全国を駆け巡りました。今号では、戦前にクニマスの卵が山梨県に分与された事情を紹介しましょう。

大正十五年（一九二六）、農林省の「水産増殖奨励規則」で、公益目的のサケ・マス養殖事業に対し奨励金を交付することになりました。秋田県は、岐阜県の年額三万二千円強に次ぐ二万四千円弱の奨励金を交付されました。国の高等官の初任給が七十五円（現在、大卒の国家公務員で約十八万円）の時代です。十和田湖のヒメマス養殖の実績が、高く評価されました。

秋田県は奨励金を元に、七年以上にわたるマス類養殖事業計画を策定しました。十和田湖産ヒメマス卵を人工孵化して、田沢湖はじめ県内湖沼に放流する計画です。田沢湖ではヒメマスを増殖させ、五年目には卵も自給自足する見込みでした（大正十四、昭和二年「水産試験場書類」九三〇一〇三―一〇七―七二）。当時、ヒメマスは都会の洋食店でオードブルなどの食材にも使われていました。

ところが、養殖事業計画は、初年度からつまずいています。大正十五年、十和田湖のヒメマスが不漁で、和井内養魚場から購入予定の卵五十万粒が二十万粒ほどに減りました。県水産試験場は、田沢湖の人工孵化場でクニマス卵による代用を試みます。明



国鱒（田沢湖産姫鱒）
田沢湖ニ於ケル當業者捕獲ノ親魚ヨリ六十万粒ヲ採卵購入ノ
豫定ナリシモ本年度ハ汛期遅延セルモ親魚ノ末遊クカ
リシタメ八十万粒ヲ採卵シ外ニ六十五万粒ヲ他縣ニ分譲セシム
ベシ當業者ヲ指導採卵セシメタリ本場分六十万ハ田沢湖
孵化場ニ收容シ田沢湖ニ放流ノ予定在ガ未ダ浮游スル
ニ至ラズ

治四〇年（一九〇七）の失敗（本紙49号参照）から約二十年を経て、県水産試験場でクニマスの生態の研究が進展し、約七割を稚魚に育て湖に放流できました。翌昭和二年（一九二七）も十和田湖のヒメマスが不漁で、クニマス卵で不足分を代用しました。

しかし、悪いことはさらに続きます。昭和三年には金融恐慌の影響で、農林省の奨励金が四割も減額されました。秋田県の事業計画は、三年目で大変な苦境に追い込まれています。県水産試験場は、窮余の一策として翌年にヒメマスからクニマスの増殖へ計画自体を大きく転換しました。右の写真は県水産試験場「業務功程報告」の一部で、「国鱒（田沢湖産姫鱒）」と記されています（昭和五年「水産試験場書類」九三〇一〇三―一〇七―一八八）。

昭和五年には、クニマス卵が長野県・山梨県・富山県に分与されています（昭和七年「水産試験場書類」九三〇一〇三―一〇七―一九〇）。

長野、山梨、富山ノ三縣ニ分譲セシメタリ

当時、クニマスはヒメマスの「地方的変化」であり同種と考えられていました。実は大正十四年（一九二五）に米国の魚類学者がクニマスを新種とする学説を発表していました。日本の学界で米国の学説を認めた昭和十六年（一九四二）の前年には、戦時国策の電源開発により、玉川の酸性水が田沢湖に流されてきました。田沢湖からクニマスの魚影は全て消えました。しかし、「田沢湖産ヒメマス」の別名は、クニマスが田沢湖を出て新天地の湖で生き延びる幸運をつかむ「パスポート」の役割を果たしたのです。

【柴田知彰】

●企画展のお知らせ

前期：「海と川と湖と」

（令和元年八月二十九日～九月二十三日）

後期：「秋田県の城下町」

（令和元年十一月十二日～十二月三日）

会場：秋田県公文書館 2階特別展示室

※詳細については、後日お知らせいたします。